

選択の原理の問題とハイデガーの歴史性概念

歴史家が無数の出来事のなかから重要なものとそうでないものとを区別する基準は何か。ハイデガーは「歴史科学における時間概念」(1916)で、歴史家の関心をひくものとは「影響のある(wirksam)」ものであり、「選択は、現在がある何らかの影響(Wirkung)や発展の結果に即してもつ歴史的関心にもとづいている」という歴史家エドゥアルト・マイヤーの説を取り上げ、リッカートと同様に、マイヤーの説を「価値関係」という概念を用いて補足している。「関心」というものはいつでも一つの観点から規定されていなければならない、規範によって導かれていなければならない。選択することは価値関係にもとづいており、歴史科学の目標とは、影響や発展の連関を文化価値との関係によって一回性において叙述することである。

しかしまた歴史科学にはその対象に関してもう一つの本質的な特徴がある。つまり、対象は過ぎ去り現実存在しておらず、過去は現在から見られることによってのみ意味をもつ。対象と歴史家との間には時間的隔たりがあるのであり、過去への通路を可能にするのは、叙述されるべき出来事の実在性の確保(史料)と史料の事象的内実の正しい解釈である。ハイデガーは、歴史科学における時間概念は自然科学とは異なる質的な性格を有していることに言及し、「いつ」を問う仕方に歴史的な時間概念の原理として価値関係が関わっていることを指摘するのである。

その後も1919年の講義「現象学と超越論的価値哲学」で、リッカートの価値関係は、歴史家が歴史的に本質的なことと非本質的なこととを区別する原理として取り上げられているが、もはや支持されていない。1920/21年講義「宗教現象学入門」では、「歴史的なもの」に対する立場が三つに分けられ、ディルタイ『精神科学序説』、ジンメル『歴史哲学の諸問題』、ヴィンデルバントーリッカートの歴史哲学が、プラトニックな第一の立場とシュペングラーに代表される第二の立場の妥協的立場として第三のグループにまとめられている。この講義でハイデガーは、ジンメルのいう「歴史的関心」をマイヤーの「影響あるもの」といった規定との関わりから説明し、そして第三の立場を「現在」を「過去」に対して明確に境界づける立場として特徴づけるのである。

こうした問題意識が『存在と時間』の「歴史性」の問題につながっていることは確かであろう。ハイデガーによれば、「歴史的把握の「認識論的」(ジンメル)明瞭化」や「歴史叙述の概念形成の論理学(リッカート)」という問題設定においては、また歴史学の対象面に定

位している場合においても、歴史は一つの学の客観としてのみ近づきうるにすぎないのであり、いかにして歴史が歴史学の可能的な対象となりうるかということは歴史性からだけ見て取れる。「対象面」に定位した立場に関して『存在と時間』では言及されていないが、ディルタイを挙げることができる。ディルタイによれば、歴史家は「作用連関 (Wirkungszusammenhang)」から対象を選ばなければならないだけでなく、対象そのもののうちを選択の原理が含まれている。そして、ディルタイもまたマイヤーに言及して、作用連関のなかでの位置をマイヤーのように「現在」によって考えるならば、「現在」のなかで何を重要と見なすかを規定する基準をもたなければならないというのである。

『存在と時間』では「作用連関」という用語は、ディルタイの立場を説明する箇所以外には、通常の「歴史」という語がもつ四つの意味を取り上げている箇所でも使われている。ハイデガーは、(1)「現在」との影響関係、(2)「過去」「現在」「未来」を貫く出来事の連関または「作用連関」、(3)人間や「文化」の変転や運命、(4)伝承、といった通常の歴史理解の分析から「歴史性」を引き出し、歴史学の主題は一回的なものでも普遍的なものでもなく、「事実的に実存にもとづいて既在した可能性」であるという。ハイデガーは、歴史学にとって対象となるべきものの選択は、現存在の事実的で実存的な選択のうちですで行われており、史料だけしか刊行しないような歴史家の実存が本来的な歴史性によって規定されていることもありうると思うのである。

選択の原理の問題をハイデガーの歴史性概念との関連から扱う場合、因果分析といった歴史学にとって重要な要素は抜け落ちてしまうことになる。しかし、歴史学の選択の原理をめぐる議論の文脈に歴史性概念を位置づけるならば、歴史学が対象とする「歴史」と哲学が問う「歴史」との関係がより明確になると思われる。本発表では、主にリッカートの「価値関係」およびディルタイの「作用連関」に注目してハイデガーの歴史性概念を考察する。